



茅ヶ崎駅前 北口風景

郷土らがさき

第153号

発行 令和4年1月1日
 発行者 茅ヶ崎郷土会
 会長 平野文明
 編集責任 平野文明

山岡景正・景継の墓石発見
 中島日枝神社の創建に関わった領主は誰
 姥島の歴史的遺構
 異人館踏切と今はない本村踏切
 鮮魚街道(なまみち)
 風(自由投稿欄)

加藤幹雄……2
 平野文明……8
 名取龍彦……16
 原俊一……24
 源邦章……28
 今井文夫・長谷川由美……32

あかちゃんはおントにかわいい。丸く、お肌はぽつちやり柔らかく、ふにやふにやしていてしなやかだからでしょう。
 人食い熊がやって来て、大きな口を開けたとしても、ひと目見たとたん、口を開けた自分を恥ずかしく思うことでしょう。
 それはそれでうなずけますが、私に向かって大きな口を開けたとしても、やっぱり失敗だったと思うでしょう。骨々、皺々、硬くてパサッ、こいつは旨くないと気づくからです。
 健康は柔らかい体にやどります。まともな考えはしなやかな心から生まれます。春の風が、冬から目覚めたお日様の、たっぷりとした光に乗って渡るように。
 柔らかな体、しなやかな心を保つにはどうすればいいのでしょうか。うーむ……。私にもできることは何だろう。
 そうだ 食べものだ！
 柔らかいものを食べることから始めよう。まずウドン、次にそば、卵焼き、豆腐、メロンパン、納豆、まんじゅう。もちろん固いせんべいはダメ、フランスパンもダメ。みかんは良くて固いリンゴはダメ。フンッ、考えているだけでだいぶ頭が柔らかくなってきた。茅ヶ崎郷土会、今年もよろしく願います。

茅ヶ崎郷土会々々 平野文明

『山岡景正(やまおかかげまさ) および『山岡景継(やまおかかげつぐ)』の墓石 発見

ちがさき丸」とふるさと発見博物館の会 加藤幹雄

一 はじめに

茅ヶ崎郷土会と協働して仮称「中島村の歴史調査会」を組織し、中島の郷土史を現在まとめていくが、江戸時代の領主山岡家を調査する過程に於いて、山岡景正・景継に関する新たな発見があったので、茅ヶ崎郷土会の会報をお借りして報告させて頂く。なお、本稿内の傍線及び注記は筆者が加えたものである。

二 山岡景正について

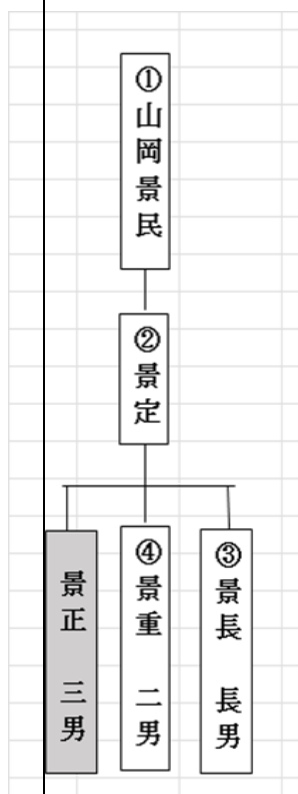
山岡景正(やまおかかげまさ)は二代景定の子で、浜之郷村・中島村の領主として天正十九年(二五九二)に初めて登場する山岡景長(やまおかかげなが)の実弟である。『寛政重修諸家譜第千四百十五』第十七(以下『寛政譜』と略記する)三六四頁～三六七頁に

景正(かげまさ)

勘左衛門 號久庵

兄が采地相模国遠蔵村(ママ)に住す

と記載されている。



浜之郷・中島の領主につながる初代景民から景正までの家系図は前図の通り、丸数字は当主の代を表す。山岡家の歴代代数は二つの数え方がある。一つは『寛政譜』に書かれている景民を初代とするもの。もう一つは龍前院や山口金次氏の著作の中で使われている、茅ヶ崎に領地を貰った景長を初代『寛政譜』では三代)としているものである。

景正について、神崎彰利『茅ヶ崎地域における近世の領主たち 2・山岡氏』『茅ヶ崎市史研究』第一〇号九〇頁に、「景長にはもう一人の弟景正がいる。『寛政譜』によると、兄景長の采地遠蔵村に住したとあるのみで詳細はわからず、また墓碑も伝わらない」とある。

一方、『郷土中島を語る』一二七頁で中島真平氏は山岡景正について次のように書いている。

このように中島の殿様の屋敷に住んでいたのは五代(筆者注『寛政譜』景民からは七代目)の山岡伝五郎景忠であるということは、皆よく知っている。しかし、中島の屋敷に先に住んだのは山岡景正というふう^①に記録の中に書かれている。この景正は歴代の名前の中には出てきていない。この景正は山岡庄右衛門景長の弟であった。景正が中島の土地に屋敷を持ったのはいつ頃からだろうか。その年代はまったくわかっていないが、景長の弟であることから考えて見ると、慶長年間(一五九六～一六一四)でなかろうか。

山岡景正が中島の土地に屋敷を持ったことについて山口金次氏の史料によると、中島村の地頭、山岡景正の殿様の屋敷は、現在の榎田氏の宅地にあった。小字、大川渕一〇〇四番地のイにあつたとされている。——中略——

このような言い伝えから考えると浜之郷村・中島村の領主山岡景長などは江戸に住み、弟の山岡景正が浜之郷村・中島村に住み、領主の代理としてふるまっていたのかも知れない。

また、『茅ヶ崎市史研究創刊号』『茅ヶ崎市内に現存する大名墓碑一覽』『浜之郷 龍前院 墓碑文 山岡家』六二〜六五頁山口金次氏(以下、山口「大名・旗本墓碑一覽」と略記する)には山岡景正について何も書かれていない。山岡家についてこれまで調査発表されてきた各氏はいずれも山岡景正について高座郡浜之郷・中島に住んでいたらしいが、墓石もなく、詳しいことは分からないとの判断であった。

次に茅ヶ崎の領主について簡単に紹介したい。

三 茅ヶ崎の領主について

茅ヶ崎市史ブックレット⑮神崎彰利『ちがさきの村とお殿さま』(以下、『ちがさきの村とお殿さま』と略記する)四頁、十二頁から要点を引用すると、中島村・浜之郷村の領主が明確になるのは

「天正一八年(一五九〇)豊臣秀吉の天下統一の過程で、関東八ヶ国(武蔵 相模 上総 下総 上野 下野 常陸 伊豆 国)が徳川家康の新領国となつた」時に始まる。「徳川氏は同年八月一日に関東入国と同時に家臣団への所領宛行(あてがい…所領を与えること)を行つた。その趣旨は、江戸を中心

としてその周辺を蔵入地(くらしりち…徳川氏自体の領地、直轄地)とし、更にその外辺で江戸から一〇里を中心として旗本領を設置する」

というものである。茅ヶ崎市域はこの旗本領に該当するのである。同書一二頁に茅ヶ崎は、

「天正一九年現在まだ未開発の平太夫新田、円蔵村から後に独立した西久保村を除いた全二ヶ村で三六給(給地)あるが、その内訳は旗本領一八給、徳川氏直轄地(幕府領)一八給からなっている。この時二ヶ村に旗本は一五名がいる。この後、慶長・元和・寛永年間(一五九六〜一六四四)には幕府領七給、旗本領三七給、そして幕末に近い天保二年(一八三一)では全二三ヶ村四四給中、幕府領五給、旗本領三九給と圧倒的に旗本領の多いことが窺える。また、一村を複数の領主が支配する相給は茅ヶ崎村三給(旗本丸毛氏・興津氏・幕府領) 円蔵村三給(旗本領のみで三給) などがある。

その後、これらの相給数は時代によつて変化していく。そのようなかで中島村は当初より明治維新まで領主は山岡氏の一給のみで、浜之郷村は山岡氏と大岡氏の二給となっている。

三 中島村・浜之郷村の領主 山岡氏について

『ちがさきの村とお殿さま』二二・二八〜三二頁に山岡氏について次のように記されている。抜粋して紹介する。

山岡氏は万葉歌人大伴家持の子孫と称する近江国の土豪で、もとは織田信長に仕え、山岡景民のとき徳川氏に属し、景長は天正一九年(一五九二)五月三日に懷島之郷Ⅱ浜之郷二二〇石・中島郷八〇石の計三〇〇石を宛行(あてがい)われ

た。山岡氏は後に加増や分知(筆者注:ぶんち・知行の一部を親族に分与すること・分地ともいう)を経て相模国以下常陸国(茨城県)・下総国(千葉県)・大和国(奈良県)等で七〇〇石を知行した。本貫は浜之郷村で、村の曹洞宗龍前院は景長が中興した累代の菩提寺である。天正一九年五月三日付けの宛行状他、所領関係文書が今も山岡家に伝存している。

山岡一族の内、中島・浜之郷の領主山岡景民を初代とした家系図を次に示す。初代景民から十一代景満までは『寛政譜』三六四頁〜三六七頁から抜粋して、十二代景風以降十五代壮吉までは、現在東京にお住まいの山岡家のご承諾を得て、茅ヶ崎市史編纂資料山岡家文書『先祖書』(以下『先祖書』と略記する)より抜粋して次に示す。○の番号は代を表す。

家系図

①景民―②景定―③景長―④景高―⑤景重―⑥景信―
⑦景忠―⑧景顕―⑨景任―⑩景明―⑪景満―⑫*景風
・景命―⑬景良―⑭景行―⑮壮吉

*十二代は二名が記載されているが「中島村の歴史調査会」の検討では、十二代は景風が亡くなったため、そのまま景命が十二代として跡目を継いだと判断した。

四 浜之郷龍前院と山岡家

浜之郷の龍前院は『新編相模国風土記稿卷六十一』(以下『風土記稿』と略記) 村里部 高座郡卷之三、二八六、二八七頁、濱之郷村によれば

龍前院 懷島山と號す、曹洞宗大庭村宗賢院末 本尊阿弥陀、本座像二尺許、江州三井寺より傳來、又薬師十二神將を

安ず木像四尺八寸、行基作、御朱印九石三斗餘 薬師領五石、寺領四石三斗、慶安二年十月賜ふ、開山楞山宗嚴 大永二年五月五日寂すと云ふ、開基大庭三郎景親の祖良正なり、中興は山岡庄右衛門景長なり、法號景長院寶庵淨珍 文祿四年三月朔日死す、境内に碑あり、子孫傳五郎景顯元禄十三年建つ、懷島山の額を掲ぐ 木庵筆 古は八幡の傍にあり 舊地元屋敷と呼ぶ、△鐘樓 鐘は元禄七年三月の再鑄なり、△五輪塔十基 二階堂十人墓と稱す、其縁故を傳へずとある。

また中興した山岡家三代目の山岡景長(景正の兄)について『寛政譜』三六五頁に次のように記載されている。

景長(かげなが) 庄右衛門 母は某氏。濱松城に在いて東照宮(家康)につかえたてまつり、天正十九年(一五九二)五月三日相模國高座郡のうちに在いて、采地二百石を宛行(あてがわ)はるこの旨御朱印を下され、後台徳院殿(秀忠)に付屬せらる。文祿四年(一五九五)三月朔日死す。法名淨珍。采地高座郡遠蔵村(ママ)の龍前院に葬る。龍前院は景長が開基せるところなり。のち代々葬地とす。

五 山岡家墓所

山岡家の墓所は龍前院本堂西北の一角、平成二十四年、新たに整備された区画に山岡景長はじめ十二代景風まで累代の領主および親族、家族などまとめられて約三十余基が祀られている。墓所の前には「龍前院開基 山岡家について」の説明板があり、山岡家の説明および山岡家と龍前院の関わり、山岡家の家系図などが解説されている。

六 茅ヶ崎市史編纂資料山岡家文書『山岡家譜』(以下『山岡家譜』と略記)に記載された山岡景正について

今回、墓石が確認

された山岡景正(かげまさ)について

『山岡家譜』に次のように記載されていることが分かった。

山岡景正 山岡勘左衛門

住ス相州大庭庄懷島

ニ 老テ後チ剃髪シ

号ス久菴ト 承應元

壬辰年五月十一日病

死ス於相州ニ 法名

傳正院一空常圓 葬

ル干龍前院ニ 銘

位牌曰フ春開露庵ト

(訳文)

山岡景正 山岡勘左衛門

相州大庭庄懷島に住

す。老いて後に剃髪し、久庵と号す。承應元年壬辰年(一六

五二)五月十一日相州に於いて病死す、法名傳正院一空常

圓、龍前院に葬る、位牌銘に春開露庵と曰う。



龍前院 山岡家墓所

山岡景正はいつ生まれ、いつから浜之郷村・中島村領主の代理的な存在であったかは不明であるが、承應元年(一六五二)に死亡するまでこの懷島(浜之郷・中島)に居住し、何とものどかな「春開露庵」と銘される生き方をし、死去後、龍前院に埋葬されたと云うことである。

七 山口金次氏の山岡氏研究と景正

山口『大名・旗本墓碑一覽』は茅ヶ崎の領主等を調べる上で大変参考になる貴重な研究書である。この中に「浜之郷 龍前院墓碑文」六二〜六五頁があり、山岡家墓碑銘が詳しく記載されている。個々の墓碑に番号を印し、番号毎に墓碑銘を記しているが山岡景正の事は何も書かれていない。このたび筆者が景正の墓碑と判定した墓石番号⑩の墓碑銘は次のように記されている。

伝正院 愛宕常円居士覺靈 承應元壬辰天三月十一日

法名の「愛宕」・卒月「三月」を誤読したため、景正の墓石と認識出来なかったと思われる。⑩番の墓碑銘は『山岡家譜』にある景正の院号、法名、卒年月日のように

傳正院 愛宕常圓居士覺靈 承應元壬辰天五月十一日

と読むことが正しいと判断され、これが山岡景正の墓と断定されるのである。

令和三年九月に筆者は墓碑銘を再確認し、読めたところは

□正院 愛宕常□居士覺靈 □□□□□□五月十一日

であった。□は読み取れない文字である。また同墓碑には妻と思

われる戒名も刻まれている。一部分だけだが、

秀永

のみ読み取れた。山口金次氏の調査では

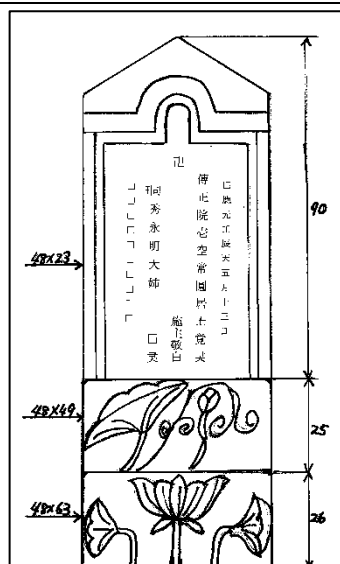
同秀永浄大姉 萬治二己亥天八月廿一日
となつてゐる。(※「同」は王扁に同)

八 山岡景正墓 墓石番号⑩

今回明確になつた景正の墓は山岡家墓所の正面に立ち並ぶ墓石列の一番右奥に位置する。墓石は江戸時代初期の板碑型で台石を入れて、高さ約一四一センチ×巾約四八センチとかなり大型で立派なものである。



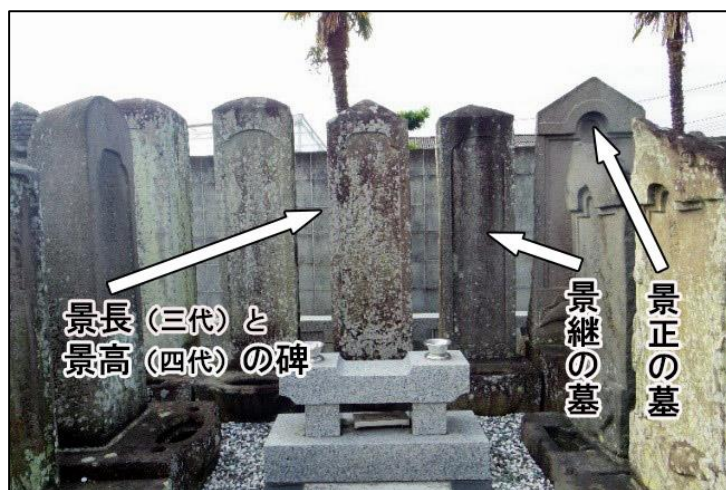
奥の板碑型が
景正墓



景正墓スケッチ図

九 龍前院 山岡家墓所 墓石配置図
次ページに掲載する。

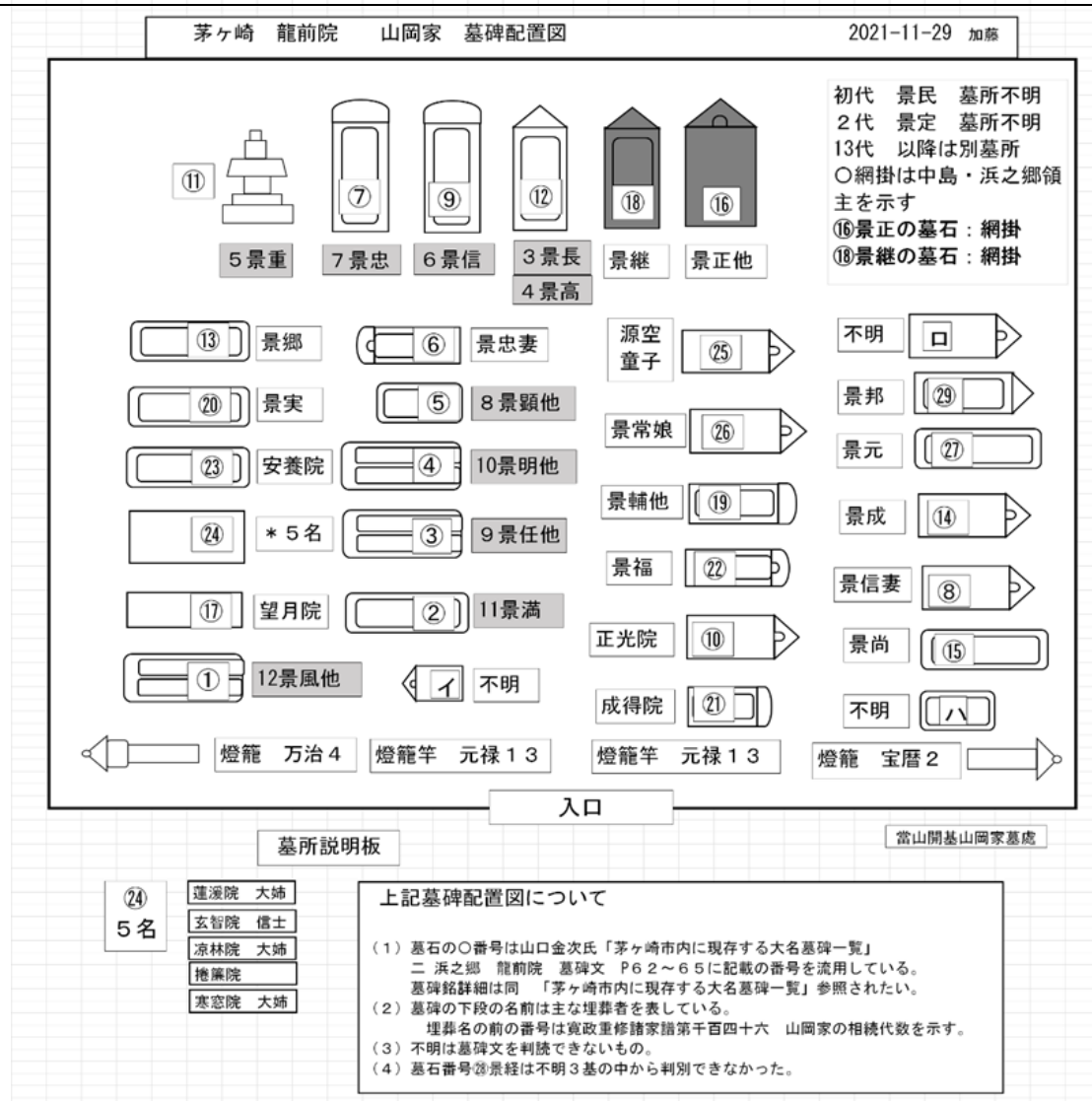
一〇 山岡景継(かげつぐ) 墓も発見



今回発見の景正、景継墓 及び景長・景高碑

今回の調査過程でもう一つの発見があつた。それは前出の山口『大名・旗本墓碑一覽』によれば安永八己亥天(一七七九)七月三日に亡くなつた山岡家九代当主山岡景宣(やまおかかげのぶ)の墓とされてゐたものであつた。『寛政譜』には山岡景宣は浜之郷村・中島村の領主として記載されておらず、山口氏は分家の山岡景宣と混同している可能性があり、令和三年十一月に墓碑銘を再調査した結果、景宣の卒年月が墓碑銘と大幅に異なることが判明した。

墓碑銘の再調査で、
寛文元辛酉曆 施主
妙 江國院殿花山月香居士 尊靈位



六月五日

敬白

と判読出来た。寛文元年は一六六一年。傍線の文字は推定である。この判読結果をもとに、郷土会平野会長の指摘により『寛政諸』三六六頁に記載されている山岡景継の法名と没年により、景継墓と判明した。『寛政諸』に「景継 九十郎 九兵衛 母は景忠におなじ。萬治元年（二六五八）三月六日はじめて嚴有院殿（家綱）に拝謁す。二年七月十一日御小姓組の番士に列し、寛文元年（一六六二）六月五日死す。法名自香。嗣なくして家絶ゆ。」とあり、墓石の所在も不明であった。

山岡景継は六代景信の子で七代景忠の弟であった。兄、山岡景忠はこの弟、景継の供養のため、元禄七年（二六九四）龍前院に梵鐘を改鑄奉納し、梵鐘は現存して茅ヶ崎市最古の梵鐘として市重要文化財となっている。

今回判明した山岡景継の墓石は先に報告した山岡景正墓のすぐ左隣にある。

なお、現在、山岡家墓石の全面的再調査を計画しており、本件もその中で調査を続け、詳細を報告したいと考えている。

今回の発見で再認識したのは現地・現物を見ることの大切さである。これまで遺跡ガイドや遺跡研究時には先人諸氏の研究報告などを重点的に参考にし引用等を行って来たが、今回は出典に遡り、出典内容の再確

認と墓碑銘等の現物を再確認することによって発見でき得たものと考えている。

本報告は龍前院殿に事前の諒承を頂いている。

また、墓石確認調査にご同行頂いた郷土会平野会長に御礼申し上げます。

引用・参考文献一覧

①『新訂 寛政重修諸家譜』第一七 昭和五十六年続群書類従完成会刊

②神崎彰利「茅ヶ崎地域における近世の領主たち2 山岡氏」『茅ヶ崎市史研究』一〇号所収 一九八六年茅ヶ崎市刊

中島日枝神社Ⅱ山王社の創建に関わった領主は誰か

平野文明

一 はじめに

本稿は加藤幹雄さんの調査研究に導かれて執筆したものであり、また本誌に掲載の同氏の文章と同じ時代、同じフィールドを扱っていて重複箇所が多いことをお断りしておきます。加藤さんのご指導、ご助言にお礼を申し上げます。

鎮守の日枝神社の境内の鐘楼に、昭和五十七年（一九八二）の年銘を持つ梵鐘が吊ってある。梵鐘には

③中島真平『郷土中島を語る』一九八六年驢馬出版目刊

④山口金次「茅ヶ崎市内に現存する大名・旗本墓一覧」『茅ヶ崎市史研究』創刊号一九七六年茅ヶ崎市刊

⑤茅ヶ崎市史ブックレット15神崎彰利『ちがさきの村とお殿さま』平成二五年茅ヶ崎市刊

⑥茅ヶ崎市史編纂資料山岡家文書『先祖書』

⑦茅ヶ崎市史編纂資料山岡家文書『山岡家家譜』

⑧『茅ヶ崎地誌集成』「新編相模国風土記稿卷之六十」茅ヶ崎市史料集第三集 平成十二年茅ヶ崎市刊

社殿によれば慶安二年（一六四九）に山王大権現を勧請し中島村の守護神とされたと伝えられており：

と書かれている。「山王大権現」は、日枝神社の江戸時代までの呼び方なので、この鐘銘に依れば、神社は今から三七〇年ほど昔に創建されたことになる。

しかし神社の創建がなぜ慶安二年なのか、また慶安二年という根拠は何なのかは書かれていない。



日枝神社

中島の郷土誌の、中島真平著『郷土中島を語る』(①以下、丸数字は本稿末に掲載した参考・引用文献の番号)にも

慶安二年に建てられたとつたえられている(二四〇頁)とあるが何に基づく説なのかは書いてない。

さらに、故山口金次著『茅ヶ崎歴史見である記』②の「中島の史跡と文化財・日枝神社」の項にも「慶安二年建立という」(七九頁)とだけしか書かれていない。

茅ヶ崎郷土会とちがさき丸ごとふるさと発見博物館の会の数人

とで、二〇一七年四月から中島の歴史を調べる勉強会を続けている。この作業の中で、神社の建立がなぜ慶安二年とされているのか、また、神社の創建に関わったのは誰で、どこから勧請されたのかという課題が浮かび上がった。このことについて、筆者の考えを述べ、皆さんの意見を伺いたいと思いい本稿を執筆した。

『新編相模国風土記稿』(以下『風土記稿』と略記) 中島村の山王大

権現は同書二卷③、中島村の項に

山王社 村の鎮守なり、大住郡馬入村蓮光寺持

と書かれており、創建年とされる「慶安二年」は出てこない。

出てこないが、同書中島村から、日枝神社の創建年を考える上で必要と思われる箇所を引用すると、

中島村 山岡伝五郎が知行なり。

慶安二年検地の水帳を用ゆ。(二八三頁)

とある。「中島村は、旗本、山岡伝五郎が治めている。鎮守の山王社は平塚市内の馬入村の蓮光寺が管理している。村内の土地の所有者や村高などを算出するための水帳(土地台帳)には、慶安二年に検地(調査)したものをを用いている」ということである。

「慶安二年」は、日枝神社の創建年としてではなく、水帳が作られた年として出ている。水帳は検地帳とも言い、村毎に、その範囲、田畑、屋敷地その他の土地の一筆毎の名請人(耕作者、所有者など)、面積、収穫量、土地の優劣などを記した村の基本台帳の一つで、領主が村を支配する場合に欠かせない記録である。



「慶安二年」の鐘銘

『風土記稿』は江戸時代末期の天保十二年(一八四一)脱稿なので、中島村は二百年近く同じ検地帳を使っていたことになる。今、この水帳(検地帳)は現存しない(『茅ヶ崎市史』5④ 五八三頁)。

地元に伝わる日枝神社の創建年は水帳が作られた年と同じなのである。これには何か隠れた事柄があるのではなからうかという思いが頭をよぎる。

『風土記稿』に知行主として出ている「山岡伝五郎」とはどのような人物なのだろうか。

二 山岡家の系譜

領主、山岡伝五郎に触れる前に、山岡家の家系を紹介しておく。史料は二件あって、一つは山岡家の『先祖書』(⑤)、もう一つは『寛政重修諸家譜』(以下『寛政譜』⑥と略記する)。

『先祖書』は加藤幹雄さんが検討中である。筆者はここにその成果の一部を使わせて頂く。『寛政譜』は幕府が大名、旗本の家系編纂を寛政十一年(二七九九)に着手し、文化九年(一八一二)に完成させた『角川日本史辞典』による。ものなので、山岡家歴代は天明年間(二七八一―一八八)まで記されている。その後継については安政五年(一八五八)までの記載がある『先祖書』に頼らざるを得ないのである。

山岡家は『寛政譜』一七卷三三九頁以降に掲載されている。本家は神話時代に始まり、分家の歴代及び女子も合わせて三九七名が記述されている。要点のみを記すと次の如くである。

一族は近江国(今の滋賀県)に居を構えた武家の家柄である。

神武天皇東征の折に道案内をしたという道臣命(みちのおのみこと)を初祖とする。鎌倉時代初期に近江国に入り、永享年間(二四二九―一四四二)に資廣(すけひろ)が勢多の山田岡という所に城を構えた。このとき「山田岡」から「田」を略して「山岡」を称号とした。資廣はこの勢多城を嫡男の景長に譲り、剃髪して光浄院を名乗る。三井寺の中に一字を立て光浄院と名付けた。嘉吉二年(一四四二)卒。その後、光浄院の歴代は山岡家から出たので三井寺との関係もできた。加藤幹雄さんは、『寛政譜』に基づいて資廣を初祖から四七代目と数えておられる。

山岡家は資廣の後、数代にわたって勢多城に拠り、五四代は景隆となる。景隆は織田信長に仕えて戦功を立てるが、天正十年(一五八二)、信長は明智光秀に討たれる。堺にいた徳川家康は急変を聞き三河に帰国しようとするが、途中の道々に一揆軍が居たので、この地に詳しい景隆が一族を率いて勢多から信楽まで家康を案内する。このとき景隆の軍の中に景隆の叔父の景民とその子景定がいて景民・景定父子と家康の関係が生まれた。景民は分家して一家を起し、子の景定は浜松で家康に仕えた。『寛政譜』は景民を分家の初代としている(『寛政譜』三六四頁)。その二代景定の後を継いだのは三代景長。浜松に居て家康に仕えた。本誌四ページの系図参照のこと。

三 浜之郷村と中島村を領知した山岡景長

天正十八年(一五九〇)、徳川家康は秀吉の命により関八州の大部分を支配地とした。時を置かず家臣団共々関東に移り、旗本などに村を領知させた。このとき関東各地の様子が大きく変わる。家康は抱えている多数の家臣団をまかない、関八州を支配し

統括するために、地域を細分して「村」となし、旗本などに宛行（あてが）って支配させたのである。ここに江戸時代の「村」が出現した。茅ヶ崎では、これに数年遅れて成立した村もあるが、江戸時代を通して二三の村があった。中島村を宛行（あてが）われたのは旗本の山岡景長（三代）で、景長は浜之郷村も同時に知行することとなった。

『茅ヶ崎市史』1⑦の一七三頁に、家康が山岡景長に発行した「山岡庄右衛門充て知行宛行状」（ちぎようあてがいじよう・あておこないじようとも）が掲載されている。

相州東郡

一 八拾石四斗

中嶋之郷

一 貳百拾九石六斗

懷島之郷

合三百石

右出置者也、仍如件

天正十九年辛卯

五月三日

（家康の朱印）

山岡庄右衛門とのへ

発行されたのは家康の関東移封の翌年である。「東郡」は後北条氏時代の言い方で茅ヶ崎市域はそこの中にあった。「中嶋之郷」

「懷島之郷」は中島村、浜之郷村のこと、両村から合わせて三百石を景長に宛行うという証文である。『寛政譜』の三六五頁には景長のことが記されている。本誌の加藤さんの文章の四頁に引用されているので参照願いたい。なお、『寛政譜』には景長が得たのは「二百石」とあるが、三百石の誤記である。

ここにおいて中島村、浜之郷村の村人にとっては山岡家が「領主様」、「お殿様」となり、年貢を納める先となったのである。

四 山岡伝五郎とは

それでは最初に戻って、『風土記稿』の中島村にある「中島村山岡伝五郎が知行なり」の「山岡伝五郎」とはどのような人物だろうか。その人物が『風土記稿』が出来た頃、中島村と浜之郷村を領知していた山岡家の当主となる。

先にも述べたが『風土記稿』は天保十二年（一八四一）に脱稿されている。この頃の山岡家当主を探せばよいのだが、『寛政譜』では山岡家は天明年間（一七八一―一八八）までしか記されていない。その後継については安政五年（一八五八）までの記載がある『先祖書』でみると、山岡伝五郎景命（二二代）であった。伝五郎景命は文化十年（一八一四）に家督を継ぎ、嘉永六年（一八五三）に亡くなっているのである。

五 『風土記稿』に見る当地に残る領主の遺品

本稿の冒頭で、『風土記稿』が記す中島村を取り上げた。ここでも同書の浜之郷村の記事も紹介しておこう。『風土記稿』三卷③の二八四―二八七頁にある。まず、浜之郷村の領主について。

小田原北條氏の時は近藤孫太郎領せし由「役帳」に見ゆ。（中略）今、山岡伝五郎・大岡雲八（共に拝賜の年代を伝えず）が知る所にして、検地は、慶安二年（一六四九）十一月山岡氏、寛文七年（一一六七）二月大岡氏、その地を糺（ただ）すと云う。

意味するところは、小田原北條時代は近藤孫太郎が領地としていたが、今（『風土記稿』作成時）は山岡伝五郎（二二代）と大岡雲八が知行する所となっている。しかし両者とも知行を命ぜら

れた年代を伝えていない。検地の年は、山岡氏は慶安二年、大岡氏は寛文七年。

「拝賜の年を伝えず」とあるが、三代山岡景長が両村を拝賜したのは先に述べたように天正十九年五月三日である。伝五郎と雲八が拝賜した年が分からないというのだろうか。大岡氏は最初に宛がわれたときの宛行状が現在は見つかっていないらしく、『茅ヶ崎市史』5④の五八三頁には「慶長五年（一六〇〇）頃」としてある。言うまでもなく浜之郷村にも出てくる山岡伝五郎は二代目の**山岡伝五郎景命**である。

『風土記稿』中島村の項に検地は慶安二年（一六四九）とあった。浜之郷村も同じ年である。この年に両村の検地を行った山岡氏は同一人物となる。

また、同書には鶴嶺八幡社と龍前院について次の様に記されている。要点のみを写しておく。

鶴嶺八幡社 慶安二年八月社領七石の御朱印を附せらる。

龍前院 本尊阿弥陀（江州三井寺より伝来）。御朱印九石三斗余り（薬師領五石、寺領三斗）、**慶安二年**十月賜う。中興は山岡庄右衛門景長なり。文禄四年（一五九五）三月朔日死す。

境内に碑あり。子孫伝五郎景顕、元禄十三年（一七〇〇）建つ。鐘楼、鐘は元禄七年（一六九四）二月の再建なり。

鶴嶺八幡社の鐘楼 文化三年（一八〇六）十一月改鑄す（古鐘は延宝三年（一六七五）作る）。

ここにも慶安二年が出ている。この年、鶴嶺社と龍前院は合わせて一六石三斗の朱印状を貰ったとある。「御朱印」とは、將軍が朱印を押した文書を社寺に発行し年貢・課役の免除を保証することを指す。中島村及び浜之郷村の山岡氏の領地分の検地と、鶴

嶺社・龍前院が朱印状を受けた年が同じなのである。「慶安二年」は山岡氏と鶴嶺社・龍前院をつなぐキーワードである。

龍前院には山岡家歴代の墓石があり、その中に寺の中興者の**景長**（茅ヶ崎で初代）の石碑もある。

また、龍前院に元禄七年に作られた梵鐘が、鶴嶺社には文化三年に改鑄した梵鐘があると書かれている。鶴嶺社の梵鐘は太平洋戦争中に供出させられて現存しないが、山口金次さんは自著の『鶴嶺八幡・佐塚明神両社縁起』⑨（以下「両社縁起」と略記する）『郷土茅ヶ崎』改巻二号所収、二三頁にその鐘銘を紹介し、改鑄したのは**山岡景満**（一代）としている。

これらの他にも浜之郷には山岡家に関わったものがあり、山口さんは次のように記している。

（一）鶴嶺八幡社の旧扁額。 **山岡伴景任**（九代）の名と延享三年（一七四六）の年銘がある（「龍前院開基山岡家に就いて」

⑧『郷土茅ヶ崎』第五集所収三六頁、及び「両社縁起」⑨三四頁）。

（二）鶴嶺八幡参道の鳥居に掛けてあつた石の扁額。 **山岡太郎伴宿禰景行**（一四代）の名と嘉永七年（一八五四）の年銘がある。（「山岡家に就いて」⑧『郷土茅ヶ崎』第五集所収三九頁、及び「懷島家と鶴嶺八幡」⑩『郷土茅ヶ崎』改巻二

号所収一九頁、「両社縁起」⑨二八頁）。

関東大震災で落下し、社務所に保管されていると山口さんは記している。

筆者はこの二つの扁額はまだ実見していない。また中島には、日枝神社の拝殿の中に、表に「山王」と書かれた扁額がある。裏には「時之領主山岡氏景忠」とある（加藤幹雄

「中島日枝神社の山王銘扁額及び日枝神社銘扁額」『郷土らがさき』一五一号⑪。

このように浜之郷・中島には領主山岡氏の遺品が残っている。

六 中島日枝神社の創建に関わった領主は誰か

小田原の北条氏が滅んでから鶴嶺八幡社とその別当寺である常光院、そして龍前院は荒れていたようである。その復興の様子を伝える「鶴嶺八幡・佐塚明神両社縁起」があり、『相州古文書』第一輯⑫二六四頁に一四号史料「八幡大菩薩／佐塚大明神両社之記録」として掲載されている。漢文だが鶴嶺社復興の箇所を読み下すと次のとおりである。筆者の注記はかっこで括った。

天正（一五七三）九三の暦数、小田原落城の後、悲しいかな社頭ごとく武家の領となる。故に伽藍、院宇損落して跡無し。かつ残るところの両宮社（注 八幡と佐塚社）は、その頃殊に佐塚の社は廢頽して、明神は雨露に浸さる。

ここに別当朝惠愍（うれうる）に、数代の一代に列して、再興の志を欲すと云うといえども、晨（あした）に悲しみ、昏（ひぐれ）に嘆き、志し有つても力なし。ついにすなわち黙止しのぶを得ず、地頭の助縁を蒙り、氏子の老少に勧め、一紙半銭を軽んぜず、寸鉄尺木を拵（えら）ばず、塵を積んで山となし、糸を聚（あつめ）て絆（つな）となし、以て本社

の拝殿、再興訖（おわんぬ）。

その後、慶安二年己丑の歳、社領の御朱印拝請の旨を謹んで言上し、相違なく御朱印朝惠之を頂戴し、もつて不朽の亀鏡（きけい。より所）として永代の社頭に備えん。

その後、八幡南大門の馬場四百二十間（七五六メートル）、廣

（ひろさ）四間の左右に松を植え、もつて能事（なすべき事）おわんぬ。

慶安三年（一六五〇）別当常光院朝惠

同年三月二十八日 南山（高野山）前之左学頭大山寺八代坊

法印賢隆春秋六十七老眼を拭いて記し焉

常光院は維新の時に廃寺になって今は無い。常光院の僧、朝惠が小田原落城のあと損落していた八幡と佐塚社の復興を、時の地頭（領主）の助縁をこうむって成し遂げた。そして慶安二年に、八幡社に下された朱印状を頂戴し、後に参道に松を植えて、やるべき事は終わった、と書かれている。今、参道と松並木は市の史跡と天然記念物になっている。

ここに「地頭の助縁をこうむり」ある。八幡・佐塚両社の復興を助けた地頭は誰だったか。山口金次さんは「両社縁起」⑨三二頁に「朝惠は浜之郷の地頭、山岡氏第四代の主、景信『寛政譜』では六代）に助けられて」と書いている。

『寛政譜』三六五頁に依って慶安二年当時の山岡家当主を見ると、景信である。寛永元年（一六二四）に父景重（五代）から家督を継ぎ、景長（三代）が高座郡に得た三〇〇石に加え、父景重が得た二〇〇石を継ぎ、香取郡にさらに二〇〇石の加恩を受け全て七〇〇石取りとなり、寛文元年（一六六一）に卒したとある。六代景信は一六二四年から一六一年まで浜之郷・中島村の領主を務めた。

龍前院が慶安二年に朱印状を受けたのも、同寺を菩提寺としていた景信の働きがあったものと思われる。また中島村と浜之郷村の検地を慶安二年に行ったのもこの景信となる。とすると、浜之郷村の八幡、佐塚両社の復興に手を貸した景信が、もう一つの領

地の中島村の鎮守、山王社の創建にも関与したのではなからうかと筆者は考えるのである。山王社が最初に文字として表れるのは景信の次の七代景忠の名のある「山王銘扁額」である。六代景長が創建に関与し、⑦代景忠が扁額を奉納したと考えるのはうがちすぎだろうか。扁額については本誌一五一号で加藤さんが紹介されている(⑪)。

蛇足ながら、山口さんは「山岡家に就いて」⑧三九頁には「常光院法印朝恵が地頭山岡景忠の助けを得」としているが、これは景信とすべき間違いである。

七 中島日枝神社Ⅱ山王社の勧請元の想定

本稿の「(二) 山岡家の系譜」で、山岡一族は一五世紀半ばから戦国時代にかけて近江国の南部に拠をかまえ、現在の天津市瀬田に勢多城を築城していたことを紹介した。

また、天津市坂本には全国の日吉(日枝)神社、山王社の総本山である日吉大社がある。瀬田と坂本間は近い。そこで、山岡家が家康と共に関東に移ったとき、先祖の地、近江の大社を勧請してきたのではなからうかということが考えられる。中島村の歴史を調べる会の例会でもそのような考えが述べられたりした。

今、東京都千代田区永田町に大津の日吉大社を勧請したといわれる日枝神社がある。この神社について『国史大事典』一一巻(⑬)に「創祀は確定できないが…」に続けて次のように記されている。

江戸城内に鎮護神として祀られたが、天正十八年(一五九〇)徳川家康が江戸城に入り、城域の拡張を行った際、紅葉山へ遷祀され、以後、幕府直轄の神社となった。慶長十二年

(一六〇七)、さらに西貝塚(千代田区埴町)へ遷され、三代将軍家光以後は朱印領六百石を寄せられた。明暦三年(一六五七)の江戸の大火で社殿を焼失したが、時の将軍家綱により万治二年(一六五九)現在地に荘重な社殿が落成し、遷宮式が行われた。以後、歴代将軍の崇敬は篤く(以下略)

何時の頃か近江の坂本から関東にもたらされていた日枝神社は、家康の関東移封後江戸城の鎮守となった。一方、中島の山王社Ⅱ日枝神社の創建に山岡景信が関与していたと想定するならこれも近江の山王権現Ⅱ日吉大社を勧請したものと考えられなくもないと考える。

しかし、筆者がここに述べた中島山王社Ⅱ日枝神社創建に景信関与説も、近江山王権現Ⅱ日吉大社からの勧請説も、今はそれを直接に表す史料がある訳ではない。筆者は、傍証に基づいた一つの仮説を示しただけに過ぎないことをお断りして本稿を閉じることにする。

引用文献

- ①中島真平著『郷土中島を語る』後藤信吾一九八六年刊
- ②山口金次著 資料館叢書4『茅ヶ崎歴史見えてある記』昭和五十二年茅ヶ崎市教育委員会刊
- ③大日本地誌大系『新編相模国風土記稿』三巻昭和四十七年雄山閣刊
- ④『茅ヶ崎市史』5概説編 昭和五十七年茅ヶ崎市刊
- ⑤『先祖書』茅ヶ崎市所有の複写版
- ⑥新訂『寛政重修諸家譜』第一七巻 昭和五十六年代四刷 続群書類従完成会刊

⑦『茅ヶ崎市史』1資料編上 昭和五十二年茅ヶ崎市政
⑧山口金次「懷島山龍前院開基 山岡家に就いて」

『郷土茅ヶ崎』第五集 昭和三十三年茅ヶ崎郷土会刊所収
『郷土茅ヶ崎』上巻昭和四十八年茅ヶ崎市教育委員会刊にも
収録

⑨山口金次「鶴嶺八幡・佐塚明神両社縁起」

『郷土茅ヶ崎』改卷三号 昭和三十五年茅ヶ崎郷土会刊所収
『郷土茅ヶ崎』下巻昭和四十八年茅ヶ崎市教育委員会刊にも
収録

⑩山口金次「懷島家と鶴嶺八幡」

『郷土茅ヶ崎』改卷三号 昭和三十五年茅ヶ崎郷土会刊所収
『郷土茅ヶ崎』上巻昭和四十八年茅ヶ崎市教育委員会刊にも
収録

⑪加藤幹雄「中島日枝神社の山王銘扁額及び日枝神社銘扁額」
『郷土らがさき』一五二号茅ヶ崎郷土会令和三年五月刊

郷土会にはいりませんか

茅ヶ崎や近隣の歴史・史跡・文化財などを愛好する集まりです。
市内、市外の史跡文化財めぐり、歴史や民俗の勉強会、会報
『郷土らがさき』の発行などを行っています。
設立は昭和二十八年(1953)四月、会員は現在八〇名程。

⑫『相州古文書』第二輯 昭和十九年神奈川県郷土研究会刊(国
立国会図書館デジタルライブラリーは一五七中の二〇三〇
マ)

⑬『国史大事典』一一巻 吉川弘文館平成二年刊

参考文献

○山口金次「茅ヶ崎市内に現存する大名・旗本墓碑一覽」『茅ヶ崎
市史研究』創刊号 昭和五十一年茅ヶ崎市政刊

○神崎彰利「茅ヶ崎地域における近世の領主たち(二)」『茅ヶ崎
市史研究』一〇 一九八六年茅ヶ崎市政刊

○神崎彰利茅ヶ崎ブックレット15『ちがさきの村とお殿さま』
平成二十五年茅ヶ崎市政刊

(二〇二二年十二月八日記)

年会費1500円

入会申込は 氏名・住所・電話番号・(メールアドレス)・申込日
を明記して年会費とともに会員及び理事へ

平野の 携帯 090-8173-8845

固定電話 0467-53-2453

茅ヶ崎の海よもやま話 (その3)

姥島の歴史的遺構

一 昭和十年開催の海神祭祀記念絵葉書



図1 絵葉書「湘南妙ヶ浦」(1) 平山孝通氏蔵

昨年五月の上陸に続いて、同年十一月二十日も姥島調査を行ないました。五月の上陸調査については会報一五二号(注1)で報告しました。本稿はその続報です。今回の上陸目的は、ドローンによる再調査と平山孝通氏からご提供いただいた絵葉書(図1・図2)に写し込まれている情報を現地で確認することです。

筆者は茅ヶ崎市文化生涯学習課、市立図書館の所蔵資料等で多くの姥島の絵葉書を見てきましたが、図2の写真は初見で

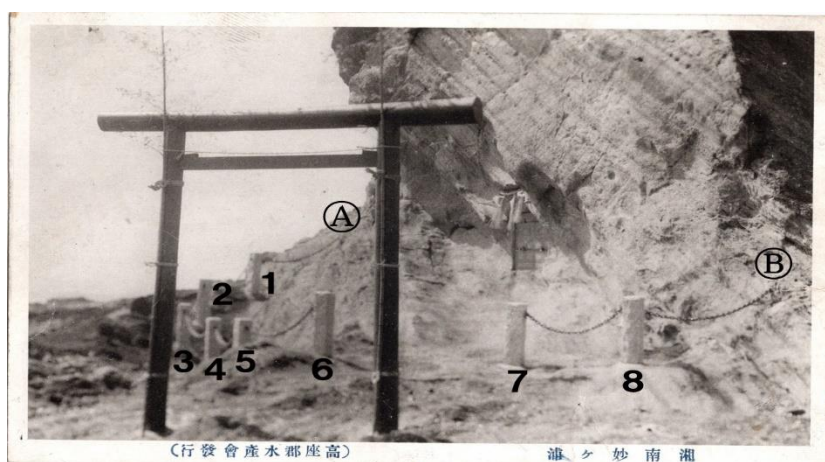


図2 絵葉書「湘南妙ヶ浦」(2) 平山孝通氏蔵

す。図2の写真を知り合いの漁師さんや郷土史関係者に見ていただきましたが、皆さんが初見とのことでした。図1はよく目にする写真です。会報一五二号(注2)で平野会長が解説した横浜貿易新報の掲載写真(昭和十年三月二十三日付)と茅ヶ崎市文化生涯学習課所蔵写真と同一の写真です。平野会長は撮影日を昭和十年三月二十三日以前の数日間と推察しています。それを裏付ける記述が図1と図2にあります。写真下部にある「湘南妙

名取龍彦

ケ浦」「高座郡水産会発行」の文字です。所蔵者の平山氏も「湘南妙ヶ浦」の文字に疑問をお持ちでした。一般的には「烏帽子岩」か「姥島」と記述される箇所です。どうしてこの見慣れない記述になったのか、昭和十年三月二十三日付の横浜貿易新報の新聞記事からわかります。

見出し「漁師気質を姥島へ 海神祭りの企画 高座郡水産会が肝いりで 湘南に新名所増す」

高座郡水産会が漁師気質を和やかに慰撫して企画中の、茅ヶ崎の沖合二十町に浮かぶ姥島に海神を祭りて海上の安全と魚族への供養と、併せて漁師間の多幸を祈るといふ嬉しい便りはいよいよ具体化し、昨十六日協議をなした結果は、来る三月十五日より二十日までの間に、寒川神社宮司高島圭一氏を聘して、各関係者は姥島に渡り、岩石を利用して海神を祀る祠を造り、祠の位置は有名な烏帽子岩の前とし、祠の前と海中に鳥居を一基ずつ建てて厳かなる神式が行われるが、同水産会ではこれを機会に前記海中の鳥居を取り巻いて柵を設け、この中に魚族の誘致を図って、千葉県における妙ヶ浦の如く湘南の新名所となすべく企画を進めている(傍線筆者)

二枚の絵葉書は、「高座郡水産会」が、この海神祭の際に発行したものと思われます。当時、現在ほど有名でなかった姥島(烏帽子岩)を、安房小湊の「妙ヶ浦」(図3)にあやかっつて新名所とすべく「湘南妙ヶ浦」と表記したのでしょう。「妙ヶ浦」「妙の浦」は「鯛の浦」とも呼ばれ、真鯛が群れ泳ぐことで知られています。

新聞記事中でも「海中の鳥居を取り巻いて柵を設け、この中に魚族の誘致を図って」とあり、姥島を魚が群れ泳ぐ観光地として



図3 絵葉書「安房名所 小湊妙ヶ浦辨天島」筆者蔵

売り出そうと考えたようです。安房小湊は日蓮の生誕地で、誕生寺があり、日蓮の鯛にまつわる伝説も残っています。

「鯛の浦」には、群れ泳ぐ真鯛を見物する観光客が集まり、古くから千葉県の観光地です。

おそらく、二枚の絵葉書は記念品として、海神祭出席者及び関係者に当日あるいは後日配付したものと思われる

す。同年三月二十六日に姥島で行われた海神祭には、寒川神社宮司高島圭一氏、石田神奈川県知事、県水産部長、課長、茅ヶ崎藤沢町議会議員等、トーカー撮影のための俳優も含めて多数が参加しています。(注3)

以上により、図1と図2の絵葉書は昭和十年三月に行われた海神祭の際に発行されたものと推定できます。

二 歴史的遺構の現地調査

図2に関しては、これほど建造物が鮮明な写真を筆者は見たとがありませんでした。現在、姥島ではつきりと確認できるのは、鳥居の跡と思われる三対の丸い穴、「鳥帽子岩」の東側の岩肌に残された方形の穴(祠(龕))、高さ一〇センチ程の三本の石柱です。

①鳥居の跡

今回の調査は、祠(龕)の前の鳥居跡に関するです。姥島には他に二対の鳥居跡があります。図2の写真からは鳥居の材質が何であるかはわかりません。木材ではないかと思えます。青竹(葉

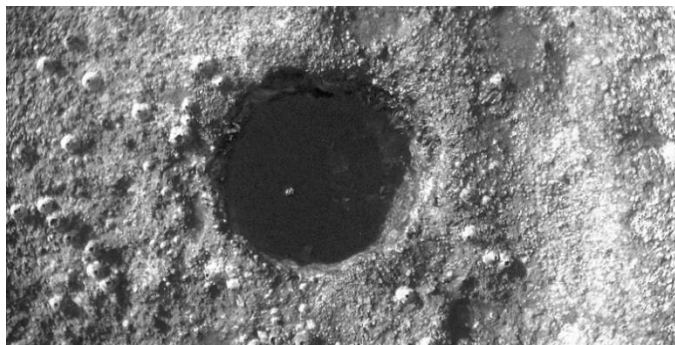


図4 鳥居跡の穴 A

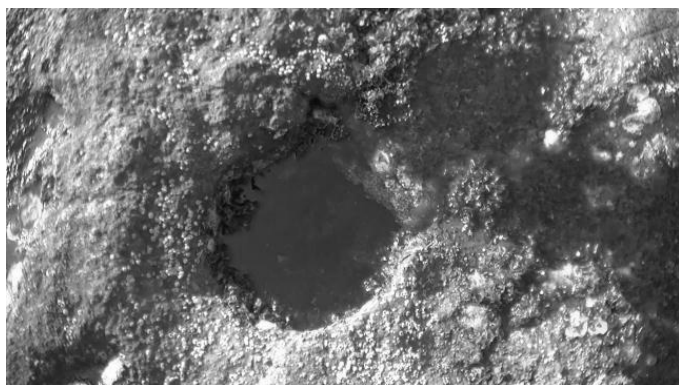


図5 鳥居跡の穴 B



図7 祠(龕)跡の突起物



図6 祠(龕)跡

は写っていませんが、図1からわかります」とそれを結わえてある縄(藁縄か)が写っています。姥島は荒波や海風に曝されていますから、青竹は日にちを置かず失われ、木製の鳥居もいつしか波風に破壊されたと思えます。第一五一号(注4)に登場頂いた古老の漁師Iさん(昭和九

年生まれ、八七歳)の記憶に、鳥居の存在はありませんでした。

図4は図2の鳥居の左柱の穴(以降Aと表記)です。図5は図2の鳥居の右柱の穴(以降Bと表記)です。

計測の結果です。

Aの直径(真円ではない)約二四^{センチ} 深さ約三四^{センチ}

Bの直径(真円ではない)約二五^{センチ} 深さ約三五^{センチ}

A・Bの中心間の距離約一七〇^{センチ}

②祠(龕)跡

図2には、観音開きの扉のような構造物とクミダレのようなものが写っています。図6が現在の写真です。くぼみの中には何もありません。台座のような形が下部に残っています。おおよそのくぼみの大きさです。方形ですが、かなり変形しています。

縦一一二^{センチ} 横一一五^{センチ} 台座 横二三^{センチ} 奥行一八^{センチ}

二〇一八年四月一日の調査時には、鉄と思われる丸い金属棒が、くぼみの上部に一本埋め込まれていました(図7)。しかし、今回の調査では確認できませんでした。抜け落ちたものと思われます。図2から推定すると扉の取り付けに使った部材であった可能性があります。漁師Iさんの記憶では、くぼみの中にはお地蔵さんが置かれていたこともあるそうですが定かではありません。

くぼみが現状になったことと関連する横浜貿易新報の記事(昭和二十八年七月二日付 写真付き)を紹介します。

見出し「ふっとんだエボシの頭 茅ヶ崎市会 うば島の被害状況調査」

茅ヶ崎市議会では先月の議会で演習地問題対策特別委員会を結成することができたが、去る三日に委員長に新倉吉蔵、副委員長に三橋清松両氏のほか(人名略)の八氏が委員にえらばれ、

演習関係の諸問題を活発に処理することになった。その手始めとして新倉委員長、吉岡議長、鈴木助役ほか各委員、市関係委員は、十日午後二時、一隻の発動機船に分乗して、問題のうば島(エボシ岩)の被害状況を詳しく調査した。有名な「エボシ」の形をした岩は砲爆撃のためほとんど昔の面影をうしない、上部は完全に崩壊している。岩の中腹にあった八大龍王の社もあとかたがなくわずかに岩のくぼみでそれとわかるくらいだ。一行はあちこちで数個の銃砲弾の弾片を拾って四時すぎ帰着、ただちに市役所で初委員会を開き、十三日午前十時衆議院外務委員会招きで添田県議が同道して新倉委員長らが出席、同委員の資料のため詳細な説明をするので、その打合せを行い九時すぎ散会した。(傍線筆者)

ここから、くぼみには八大龍王が祀られていたこと、砲撃で祠(龕)が大破したことがわかります。八大龍王に関しては、先述の横浜貿易新報(昭和十年三月二十三日付)の記事の関連として、「姥島に石造の龍宮を設けて大海神祭を行ふことになった」(横浜貿易新報 昭和十年二月四日付)がありました。南湖には八大龍王を祀りする八大龍宮社(八大龍王社)があります。地元の漁師さんは、この神社を「龍宮さん」と呼んでいます。昭和十年二月四日付記事中の「石造の龍宮」の龍宮は、八大龍王を指すものと思われます。

記事中の演習とは、辻堂海岸にあった日本海軍の辻堂演習場が、戦後アメリカ軍の上陸演習場として接収され、昭和十二年十月の上陸演習を皮切りに上陸、砲撃、爆撃など幾種類もの演習が度々実施されたこと、とくに射撃訓練が行われるオーボー第一、第二

1〜8です。岩に繋がれた部分を、左が④、右が⑤としました。④は特定できませんでした。⑤には人為的に穿ったと思われる直径三センチ程の穴がありました(図10・B)。鳥居跡の穴は先述の通りA、Bです。



図8 祠(龕)・石柱・鳥居の穴の跡 加工は筆者

区域は茅ヶ崎海岸の全面を覆っており、姥島が砲撃目標として、鳥帽子岩の上方が欠ける被害を受けたことを指しています。

(注5)

③石柱(石柱跡)

今回の調査の目的です。図8は佐藤太郎氏がドローンで撮影した写真です。図9は前回の調査時の写真です。位置関係がわかるように遺構(推定も含む)に記号を付しました。図2に写っている石柱が左から

同行した一級造園施工管理技士の野崎幸夫氏からご助言をいただきながら石柱の調査をしました。

石柱1〜8を特定するために三つの判断基準を設けました。

基準A 石柱の一部分が残っている。

基準B 石柱はないが、岩を方形に削った跡とモルタルが確認できる。

基準C 石柱もモルタルもないが、図2の写真の位置から推定する場所にくぼみがある。



図9 2021年5月30日撮影 加工は筆者



図10-5 石柱跡

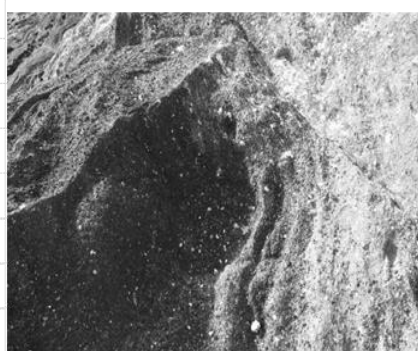


図10-1 石柱跡



図10-6 石柱跡



図10-2 石柱跡



図10-7 石柱跡



図10-3 石柱跡



図10-8 石柱跡



図10-4 石柱跡



図10-B

尚、姥島の岩には多数のくぼみがあり、自然か人為的かの判断は難しいです。モルタルはセメント、砂、水を混ぜたもので、石柱を岩に固定するために使いました。

石柱1～8の判定結果です。

1・8は基準C

2・5・7は基準B

3・4・6は基準A

石柱間(中心間)の距離です。

1—2間一三〇センチ

2—3間一二七センチ

3—4間一四四センチ

6—7間三二八センチ

一三八センチ
間九三センチ

5—6間一四五センチ

8—B間九八センチ

4—5間

7—8

基準Aの石柱は方形の形が崩れていますが、約一八センチ四方です。

六寸角で製作したものと推定します。材質は花崗岩(御影石)です。特徴は黒雲母が少ない花崗岩です。石柱を建てた場所の岩盤の状態や高低によって距離に違いがありますが、柱間の距離は内寸(柱の内側同士の距離)四尺、真々(柱の中心間の距離)四尺五寸を基準にして建てたものと推定します。また、図2の写真から、石柱の高さは二尺から二尺五寸(六〇～七〇cm)であったと推定します。

寒川神社宮司が海神祭に出席していますし、「八大龍王の社」と前述の新聞記事に出ていますから、神社などの玉垣のように石



図12 烏帽子岩の中腹にある多数の銃弾痕

図11は漁師Iさんの息子さんが「烏帽子岩」から掘り出した銃砲弾です。烏帽子岩の北側の岩肌には、いくつもの丸い穴が開いています(図12)。以前から何の穴か疑問を持っていました。姥島の誕生過程でできた穴かと思いい、地質の専門家にお聞きしましたが不明でした。答えは、戦後、地元漁師の子どもたちが岩肌にめり込んでいた銃砲弾を掘り出した跡でした。ほとんどの銃砲弾がつぶれたり、破損していましたが、変形していなかった図11は、漁師Iさんの息子さんが磨いて大切に



図11 烏帽子岩にめり込んでいた銃砲弾

柱を設置したものと考えられます。鎖状のもので石柱を繋ぐ玉垣の例は他にもあります。

石柱はなぜ失われたのでしょうか？断面は、切断したのではなく、破壊され、折れたように見えます。祠(龕)や「烏帽子岩」頭頂部と同様にアメリカ軍演習の砲爆撃(銃砲弾)による破壊でしょうか。不明です。



図13 祠(龕)跡の起点

保管してあったとのことでした。かなり大きくて重い銃砲弾です。

戦後、金属が貴重だったときに子どもたちが収拾して、「コレクション」にしたり、業者へ売ったのかもしれない。先述の横浜貿易新報の記事(昭和二十八年七月二日付)にも「一行はあちこちで数個の銃砲弾の弾片を拾って」とあります。

三 まとめ

二〇二一年十一月二十日の調査結果として記録しました。図1と図2にあった八本の石柱の場所は推定も含めて、ほぼ確認することが出来ました。記載した数値は、専門家が道具や器械を使って測量したものではありません。巻尺等で計測したため数値には誤差があります。

太平洋上の姥島の自然環境は大変厳しいです。自然の力は絶大です。今回の調査時には失われている遺構もあるかもしれません。特に、石柱跡2のモルタルの消失、石柱4の破損、岩からの分離消失の可能性を感じました。

注釈

(注1) 『郷土らがさき』一五二号 一一一六頁 茅ヶ崎郷土会 令和三年刊

(注2) 『郷土らがさき』一五二号 一七―二四頁 茅ヶ崎郷土会 令和三年

(注3) 『郷土らがさき』一五二号 二三頁 茅ヶ崎郷土会 令和三年

(注4) 『郷土らがさき』一五一号 五頁 茅ヶ崎郷土会 令和三年

(注5) 茅ヶ崎市史ブックレット二『湘南の風景 茅ヶ崎海と緑の近代史』三五―三六頁 茅ヶ崎市 平成二十一年

写真

図8はドローンによる佐藤太郎氏の撮影
他は筆者の撮影

④ 龕(祠)跡からの人工物までの距離

祠(龕)跡には起点とするものが見つかりませんでした。とりあえず図13で指し示した場所を起点として、それぞれの遺構までの距離を計測しました。今後、今回の起点が、自然的、人為的に欠損、消失する可能性があります。

④は痕跡がない

1まで五五〇センチ	2まで六〇五センチ	3
4まで六四七センチ	5まで六七五センチ	6まで六七六センチ
7まで七五〇センチ	8まで七四五センチ	⑧まで六〇五センチ

鳥居柱基部Aまで一二五〇センチ 鳥居柱基部Bまで一二五〇センチ

東海道線 茅ヶ崎の踏切名とその物語り(その二)

異人館踏切と今はない本村踏切

一 「47 異人館踏切」

(番号は東海道線の東京駅からの踏切番号)

この踏切は文化資料館ブックレット1『あのまちこのまち歴史まち』一三三頁(市教委二〇一〇年刊)に次の記載があります。

ラチエン通りがJRの線路と交差する踏切を「異人館踏切」と呼ぶのは、異人館と呼ばれたボールデンの屋敷が、現在のひばりが丘にあつたからです。

ということイギリス人ボールデンの屋敷からとった名前でした。その



図1 異人館踏切(北を望んで撮影)

た。そのボールデンという人は『茅ヶ崎を彩った70人』(茅ヶ崎市史編集委員会編平成二十九年茅ヶ崎市



図2 異人館踏切の位置図

刊)五三頁に「ウィリアム・F・ボールデン」が載っていました。以下その一部を抜粋しますと

原俊一



図3 現在の本村地下道

明治期から昭和戦前期にかけて外資系商社などで活動したイギリス人。1867年生まれ。ボールデンは明治中期に来日し、横浜にあったアメリカ系商社フレーザー商会、ヘリヤー商会などに勤務した。明治後期に茅ヶ崎村出身の三橋リセと結婚し、当時の松林村菱沼に土地を取得して別荘を建てた。このボールデンの別荘は、フランス人エメー・コイの柳島の別荘や、同じくフランス人アルフォンヌ・メクルの南湖上町の別荘とともに、地元の人びとから「異人館」と呼ばれた。とあります。

二 踏切から地下道に変わった本村踏切の物語り

『郷土らがさき』第七六号(平成八年五月一日発行)に寄稿の米山隆氏の「踏切物語り(桃の本の下的小道)」に、本村の浜道(神輿道)が東海道線で分断されていることのいわれと、その時期について興味深いお話があるので抜粋します。

昭和五、六年当時、現在のJR東海道線の本村地下道、北側一帯は春は桃の花咲く桃源郷であった。その下に一筋、野路が通い、線路につき当る。踏切もなく南側の道へ行くにはバラスを踏みしめ、レールを誇いで行くより外はなかった。

— 中略 —

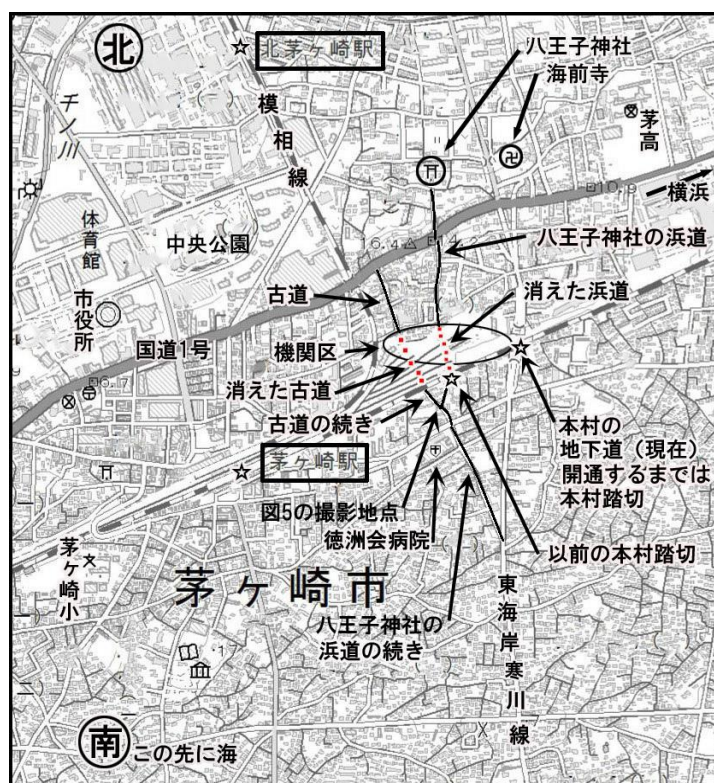


図4 機関区開設で消えた道と本村踏切

地下道、開通以前の平成の始めまでは東京起点五七K四五七Mの本村踏切と称する踏切道であった。更にそれ以前の本村踏切は現在の位置より西寄り約三〇〇Mの地点にあった。

この踏切に架かる道は「浜道」といって、本村集落の鎮守、八王子神社の大門より国道一号線を横断し、一直線に海岸へ向う農漁労の汗に滲んだ古くからの道であった。

現在この道は途中の茅ヶ崎機関区の構内で中断されている。線路南側の徳洲会病院、東側の脇道がその旧道である。

浜道が道路としての機能を失って、桃の木の下的小道に移転されたのは次の様な経緯があったのである。

JR相模線の始めは大正十年(一九二一)、相模鉄道株式会社として創立された。茅ヶ崎―寒川間に相模川で採取された砂利を積載した貨車を、茅ヶ崎駅構内で入換して東海道線經由で京浜間へ輸送する目的で開通された、乗客はむしろ従であったのである。

戦時中は茅ヶ崎の後背地、座間の士官学校を始めとし、相模線北部の軍需工場の輸送を担った、並びに軍略上の見地から中央線と高崎線の、東海道線への短絡線として昭和十九年(一九四四)国鉄に買収(原文は「売収」)された。

昭和二十年八月、第二次世界大戦は日本の無条件降伏によって幕を閉じた。大戦は終わったとはいえないまだ中国大陸では、中共軍と国民政府軍の内戦は治らず、隣国朝鮮では三十八度線を挟み紛争が絶えることなく、戦禍は拡大の一途をたどっていた。

緊迫した状況に日本の鉄道輸送の主動脈、東海道線の一支線である相模線の繁忙は大戦前にも増して、貨物ダイヤは増



図5 図4中に示した「図5の撮影地点」から北を望む。「古道」と「浜道(旧道)」の先に東海道線があり、その向こうが機関区。

発されていく。それに伴い動力車及び車輛の増強は急務を要し、茅ヶ崎機関区、構内の拡張は必然的となった。

終戦の翌二十一年、町では機関区拡張の噂が流れた。次の談話は本村の浜道沿いから幸町へ移転されたA氏の話である。「私は昭和二十一年中国から復員した。その頃我が家の移転話があつて翌年(二十二年)現住所へ越してきた」と語られている。

機関区構内：拡充の敷地確保は進駐軍の至上命令で行われたという。当時駅南口の東、線路沿いの幸町一帯は未開の畑や荒地だった。その頃農地改革が行われて、機関区周辺の浜道沿いの住民は否応なくこの地に移転した。時を同じくして道に架かる本村踏切も、五七K四五七M地点へ移転して浜道は前後を残し構内に消えた。



図6 米山氏の本村集落の遺跡相関図

以上が米山隆氏を書き残した浜道と古道の途中が消えたこと
理由です。また、米山氏は手書きの図を残しています(図6)。
線路の北側で浜道と古道が点線になっている部分が消えた部分で

す。「平成七年二月五日米山隆氏作図」とあるが、何かに印刷さ
れたものかどうかは不明です。
私は、今は東海岸北に住んでいますが、江戸の頃から代々本村
で生活していました。浜道が国道一号にかかる角の一つ隣で育

ち、浜道の、北の終点の八王子神
社は子供の頃の遊び場でした。小

さい時からこの道(浜道)は
南に行くとき止まり、機関
区がその先にある。何故?と
思いながら茅ヶ崎小学校に通
つたものです。その何故が、
この米山隆氏の話と地図で氷
解しました。徳州会病院の浜
道の傍に八王子神社の土地も
残っています。

追記

本誌前号一五二号掲載の
「踏切名とその物語り(一)」
七頁に、「44 伍仁原踏切
(こにはらふみきり)を近所
の人は「こにつばら踏切」と
呼ぶ」と書きましたが、地元
の明治四十二年生まれの方は
「こにわら」と呼んでいたと
伺いましたのでここに書き添
えます。

鮮魚街道（なまみち）

源 邦 章

一 はじめに

朝日新聞夕刊の三面記事欄に「マダニヤイ」とことこ散歩旅」という題名で今でも続いている記事があります。これは東京及び周辺の街道を紹介するもので、令和二年六月から七月にかけて「鮮魚街道」として二〇回に亘り連載されました。「鮮魚街道」とは何か…。それを紹介する前に、鮮魚街道は利根川の変遷と大きく関わりがありますので、このことから考えて行きたいと思えます。

二 利根川の東遷とその影響

遡る事戦国時代の末期、豊臣秀吉が小田原城攻めを行ない北条氏が降伏する寸前のころ、秀吉は徳川家康に關八州与えるが、徳川領である駿河、遠江等は召し上げるがどうか…と問われました。家康はこれを拒否すれば北条氏と同じ運命になると考えたのか、止むを得ず承諾し、關八州の中心とすべく江戸へ赴きました。当時の江戸は關八州の中心であった小田原や鎌倉と違い、戸数僅かな寒村に過ぎず、その上利根川が江戸湾に注ぎこみ、毎年のように洪水をもたらしていました。そこで家康はこの利根川の流路を、江戸湾に流れ込むのではなく、中流で銚子へ流れるように指示しました。これを利根川の東遷と言います。

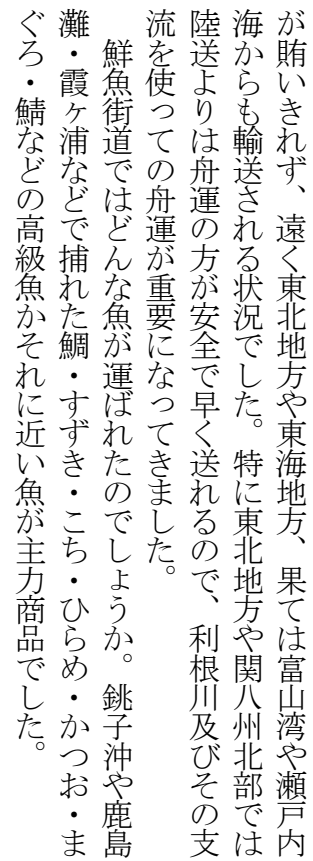
この東遷の本来の意味は前述したように、江戸の町を洪水から守ることでしたが、その他にも奥州伊達藩からの攻撃を利根川で

守ることや、關東平野の新田開発、東北地方や關八州の米や諸国物産の輸送も目的としていました。特に米などの輸送はそれまで船で房総半島沖を廻り運んでいましたが、そこは親潮と黒潮がぶつかり船舶の遭難が相次いだので、銚子から利根川を遡り關宿で江戸川に入り行徳へ、行徳からは新しく開削された小名木川を通じて江戸の中心部で陸揚げするようになりました。この方法だと第一に太平洋の荒波より安全に航行出来、第二に銚子から二、三日で江戸に到着するという利便性が重んぜられ、江戸時代中期以降は江戸市民百万人の食糧の確保が出来るようになりました。

しかし自然のなせる技は恐ろしいもので、この利根川の東遷は人為的だったため、土砂が堆積して特に中流域の野田市關宿から現在柏市の布施辺りまで浅瀬が出現し、船の航行が難しくなり、その上に天明三年（一七八三）の浅間山の大噴火の影響で大型船（高瀬舟など）が航行出来ず、はしけに積み替え、關宿で江戸川に入った所で大型船に積み替えねばならなくなりました。米や諸国の物産はそれでもよかったです、一日も早く江戸に届いた鮮魚などは銚子から江戸への行程の一部を陸送に頼らねばなりませんでした。ここに「鮮魚街道」（なまみち）が出来ました。

三 江戸への物資輸送状況と鮮魚街道運送の主要点

江戸時代の中期以降、江戸の人口は百万人を超えてきたため、その後背地である關八州だけでは食糧（特に米）やその他の物品



その輸送方法は、鮮度のすぐ落ちる鯖等は腹わたを抜き笹の葉の中に入れ、それを籠や箱に詰めて、また比較的鮮度が保たれる鯛などは血抜きして送られました。五月から七月は全行程「活舟」（舟の底に魚を活ける装置のある船）を使いましたが、その他の季節では、銚子を出発し、木下河岸又は布佐河岸でおろし、木下街道を木下から行徳へ、鮮魚街道を布佐から松戸へ駄送（馬で陸送）し、江戸へ送りました。

当初は木下や布佐などから駄送したようだが（文献上は木下からの鮮魚駄送は一件しか見られませんが）、木下河岸からは布佐河岸からよりも長距離になることや、宿場ごとに荷の積み替えをしなければならぬという理由で、布佐河岸からの輸送に切り替えられました。そしてこの布佐―松戸間の道を鮮魚街道（なまみち）と呼ぶようになりました。鮮魚街道は木下街道より八^{はち}段短く、宿場ごとの荷の積み替えがない（「通し馬」と呼ばれた）利点がありました。

木下河岸や布佐河岸の「河岸」とは、河川の岸にある「川の港」という意味だったようです。そして時代が過ぎると船着場を指すだけの名称ではなく、河岸問屋などの運輸機構も含み、その機能を持つ集落の呼び名となったようです。

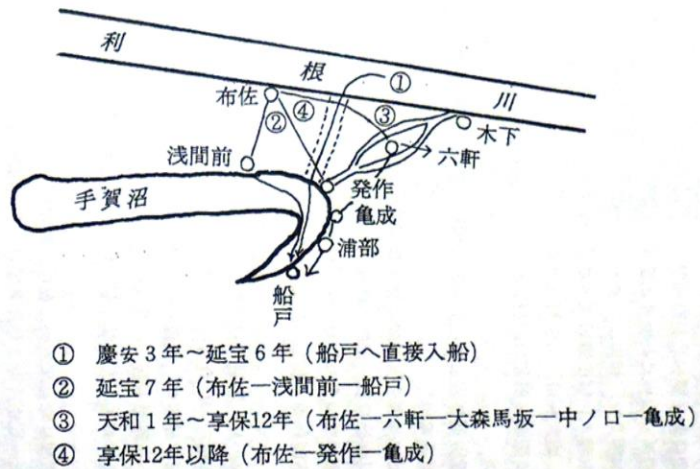
四 鮮魚街道の所要時間と変遷

銚子から江戸までの所要時間は、銚子を夕方出船し翌未明に布佐河岸に到着、布佐から駄送

四 鮮魚街道の所要時間と変遷

銚子から江戸までの所要時間は、銚子を夕方出船し翌未明に布佐河岸に到着、布佐から駄送

図2 布佐付近の鮮魚輸送路の変遷図



がて手賀沼やその周辺の干拓が進み、川が埋め立てられたので、やむなく布佐河岸から駄送して手賀沼畔に行き、そこでまた船に寄せ船戸河岸に行き駄送する第二のルートが使われ始めました。しかし積み荷を二回も積み替え魚の鮮度が落ちるため、次第に手賀沼を通らずに布佐河岸から駄送してそのまま松戸へ向かうようになりました。しかし当時、手賀沼周辺は湿地帯だったため、かなり迂回しなくてはならず時間も短縮出来ませんでした(第二のルート)。やがて手賀沼の干拓が進み、湿地帯が新田として開拓

して昼頃までに松戸の納屋河岸に到着そこで再び船に積み替え、その日の夕刻から夜までに江戸の日本橋に到着、翌朝の魚市に出すという行程でした。

鮮魚街道は当初から街道として成立していたのではなく、様々な要因で変化して行きました。当初は利根川が手賀沼と繋がっていたので、船は手賀沼へ入り、船戸河岸で荷を下ろし駄送しました。や

されたので、これからご案内する最短の第四ルート(鮮魚街道)を取るようになりました。

五 鮮魚街道を訪ねて

- ◎出発地 布佐河岸・観音堂「魚河岸」銘の手洗石
- ◎若山牧水歌碑
- ◎月影の井(日本三井の一つ)
- ◎阿夫利神社・石尊(しゃくそん)様
- ◎中間地点 常夜灯 相馬屋
- ◎高麗神社「開墾百年記念碑」
- ◎二十世紀公園二十世紀梨の原木
- ◎到着地 納屋河岸跡 青木源内
- ◎大杉神社・「愛惜の碑」
- ◎浦部の百庚申
- ◎鳥見神社(切られ庚申)
- ◎自衛隊基地
- ◎子と清水の一茶句碑
- ◎千葉大学園芸学部

この鮮魚街道は出発地の我孫子市から印西市・白井市・柏市・鎌ヶ谷市、最後に松戸市に至る距離にしてほぼ三〇歳の行程です。その中に右記しましたように様々な名所旧跡があります。まず出発地の我孫子市の布佐河岸ですが、当時は利根川に堤防などなくて、船の中継地として賑わっていました。今では近くにポツンと観音堂があるのみです。中には馬頭観音が本尊として鎮座しています。秘仏ですので普段は拝観出来ません。境内には正面に「魚かし」と彫られた手洗石があり、また我孫子市教育委員会が立てた「鮮魚街道」の案内板が立っています。

次いで開枿橋の畔の「若山牧水の歌碑」や大杉神社の「愛惜の碑」を見ながら進むと昔の浦部の集落に入ります。ここには鮮魚街道を少し離れた場所に「月影の井」という古い井戸があります。この井戸は鎌倉市の「星影の井」と福島県二本松市の「日影の井」と共に日本三井の一つのことです。この集落の新しい道路の端に「浦部の百庚申」と呼ばれる百基の庚申塔群が並んでい

ます。当地の特色ある庚申塔で、百基並んでいる様は異様な風景です。「百庚申」は茅ヶ崎方面には見られず、柏市に六ヶ所、我孫子市に二ヶ所あります。この新道と鮮魚街道が合体した道を進むと正面に大きな石の鳥居が見えて来ます。その手前の道を右に曲がると右奥に阿夫利神社が鎮座しています。神奈川県の大井町の阿夫利神社を勧請したもので、江戸時代に「大山詣で」を楽しんだ名残で、「石尊（せきそん）様」とも呼ばれています。

阿夫利神社を過ぎてしばらく歩くと十余一という街中に入り、国道一六号線に出るまで一時間程歩きます。国道を越えた所の鳥見神社の境内には十数基の庚申塔があり、その最奥に「切られ庚申」と呼ばれている庚申塔があります。魚の運搬人が夜中、火の玉に襲われ刀で切りつけた跡だとの事。ここを過ぎて鮮魚街道をさらに進むと、この街道の中間点に当り常夜灯が見えて来ます。この常夜灯は明治十二年（一八八〇）の建立で、その隣には相馬屋と呼ばれた茶屋がかつてはあり、鮮魚師（なまし）と呼ばれた鮮魚の運搬人がひと息ついた所でした。今は見当たりませんが昔は古い井戸があり、鮮魚に水を掛け生き返らせたとの事です。

ここを過ぎると街道は突然ぶつかる広大な「海上自衛隊下総航空基地」で途切れてしまいます。戦前はゴルフ場、戦後は米軍基地、現在は海目の航空基地です。街道が一旦途切れるので迂回します。鮮魚街道に戻ってさらに進むと、東武野田線六実駅を過ぎた所に高麗（たかお）神社があり、境内に「開墾百年記念碑」が建っています。明治二年（一八六九）豪商三井八郎右衛門が開墾会社を作って開拓民を送り込み、順番と美称を組み合わせて次のような地名としました。

初富（鎌ヶ谷市） 二和（船橋市） 三咲（船橋市） 豊四季（柏市） 五香（松戸市） 六実（松戸市） 七栄（富里市） 八街（八街市） 九美上（佐原市） 十倉（富里市） 十余一（白井市） 十余二（柏市） 十余三（成田市）

さらに行くと「子と清水」という所です。昔、老人がいつも酔っているの、不審に思った息子があとを付けると、湧き出る清水を飲んで酔っていた。息子がその湧き水を飲むと普通の清水だった。そこでこの名前がついたとの事。一茶の句碑があります。

母馬が番して吞ます清水かな
次いで二十世紀公園や千葉大学園芸学部を横に見て最終地の松戸市納屋河岸跡に到着します。我孫子市の布佐河岸で陸揚げされた鮮魚等は、ここまで駄送され、再び舟に乘せ替えて江戸川を下り日本橋の魚河岸へ運ぶ中継地点でした。この地で舟問屋を営んでいたのが「利倉屋（とくらや）」の青木源内さんという人。源内を襲名して現在は一三代目という事でした。青木家がある所が最終地で、青木家邸内には今でも黒板塀とその碑があります。

六 あとがき

鮮魚街道の案内を書いている内に書きたい事が次々と浮かんできました。特に利根川の東遷、水運状況などさらに勉強して後日に期したいと思っています。

この鮮魚街道に限らず、駄送っていた全ての街道は、明治二十三年（一八九〇）「利根運河」の開通により役目を終えました。その利根運河も明治三十四年（一九〇一）の成田線の開通により江戸時代から続いた利根川水運に終止符が打たれました。（完）

参考文献

①『朝日新聞』夕刊 令和二年六月〜七月

- ②『新・利根川図誌』下 山本鉦太郎 崙書房出版
③『我孫子市史研究』六 「鮮魚の輸送」 山本忠良
④『利根川読本』「中利根川の浅瀬出現と河岸争い」「賑わった利根の河岸物語」
⑤『楽しい東葛事典』「利根川の東遷と河川交通」

- ⑥『河岸に生きる人々』 川名登 平凡社
⑦『我孫子市史ガイドクラブ会報』一五七号 関宿を巡る
⑧小説『大利根開花伝』 大屋研一
⑨図1は文献②から、図2は文献③から引用しました。

風 自由投稿欄

歌六首

今井文夫

庭に咲いた鉄砲ゆりの生命力に感じる

けだるきお盆の午後に

点々と庭を彩る鉄砲ゆり

遠き日々消えては浮かぶ走馬燈

ゆらりゆらりと風にゆられて

蝉しぐれ降る盃蘭盆の午後

春は爛漫

夜更けて

真子さまのお卯といふモッコウバラ

名残惜し夜更けゆきて涼涼と

今年も咲きぬ春は爛漫

むらくも渡る十六夜の月

懐かしきふるさとのかをり

木犀の董りただよふ散歩道

ふと呼び覚ます少年の日々

時は巡りぬ

僧の読む十七回忌の般若経

静かに流れて時はとまりぬ

俳句をきっかけに国際交流

北マケドニアのアンドリヤナ・ツベトコビッチさんの俳句

長谷川由美

北マケドニアとの文化交流をご紹介するのも、何度目になるでしょう？

昨年は、市民文化祭もコロナ禍の影響を大きく受けましたが、リアル会場で開催され、二〇部会中、一八部会が参加となりました。その一つ、十月二日に市民ギャラリーを会場にした俳句大会では、北マケドニアの人が作ったHAIKUをご紹介いたしました。

北マケドニアでも、俳句は親しまれていて、即興でつくり、歌のように唄ったりするのだと教えてくださったのは、アンドリヤナ・ツベトコビッチさんでした。彼女は、北マケドニア共和国の初の駐日全権大使（二〇一四～二〇一八）を勤められた才媛です。四〇代で息子さんをもつお母さんでもあります。

お目にかかったきっかけは、二〇二〇年六月に予定していた音貞オツペケ祭で、マケドニア人の方にも演劇に出演してもらおう

ということからでした。とても気さくに、協力を快諾してください。マケドニアの民族衣装は、本物は高く、手に入らないけれど、北マケドニア国内の通販で買えば安価なものがあるから、子どもたちに着てもらいましょう！などと盛り上がりました。

また、アンドリヤナさんは、映画の研究者で小津安二郎監督の大ファン。一五分の日本映画を京都でプロデュースもされたこともあります。作品は、とても日本的でいて、視点が日本人ではないような、でも日本人の内面が滲み出るようなものでした。

さらに写真や俳句が趣味とお話になったのでした。京都の風景を自身の感覚で画像に収め、自作のHAIKU（マケドニア語、英語、ローマ字で日本語）でカラージュした映像作品がYouTubeに上がっています。

昨年の文化祭俳句大会では、「茅ヶ崎八景」の紹介のため、プロジェクトとスクリーンを使用されとのこと、これはチャンスと、アンドリヤナさんのHAIKU動画を上映させていただきました。日本語の文字による表記は含まれないため、拙いながらローマ字を日本語文字に起こしました。印刷し、お配りしたところ、みなさんとても熱心にご覧になり、「うーん」という感嘆の

声や、「少し変えるとグンと良くなる。伝えてほしい。」などのメッセージまでお預かりしました。

俳句と言っても、日本語以外は、三つの短いセンテンスで構成される「詩」というイメージが強いです。動画に納められた一四句の中から、私が好きな句をご紹介します(素人ですので、本当の良し悪しは分かりません。ご勘弁を。)

手みやげに 莓大福 たずさえて

雨の音 月の香りと 生きている

森の中 空を映せる 池ありて

神奈川県内でも茅ヶ崎は俳句大会の応募が多く、俳句が盛んな地域だそうです。文化祭では、毎年、姉妹都市ホルホルへも募集の告知を送り、数句の参加があります。

今春は、神奈川県の俳句大会が茅ヶ崎にくるそうですので、さらに盛り上がるでしょう。コロナの状況などが落ち着いたら、ぜひアンドリヤナさんにご来訪いただき、俳句&HAIKU談義に花を咲かせていただきたいと願っています。

アンドリヤナ ツベトコビッチさんの映像作品

「Kyoto MON Amour」(写真と俳句)

「Purple & Gold 紫と金」(短編映画)

YouTubeでご覧いただけます。

お不動様の縁日に「サロメ」公演

長谷川由美



登場人物集合 中央はヘロデ王の椅子、右に長持、サロメは筆者

二〇二二年十一月二十八日、川上貞奴一座の演劇「サロメ一幕」を復刻上演し、サロメを演じさせていただきました。

公演日にこの日を選んだのは、貞奴さんがお不動様を深く信仰されていたからです。岐阜県各務原市の木曾川河畔に、私財を投じ「貞照寺」を創建したほどでした。こ

の縁があつたのかどうか？不思議な一致が発見されました。

今回の舞台に登場した大道具「椅子」と「ながもち(カッソーネ)」は、大正期に帝国劇場で使用され、その後、吉田幸三郎氏が所有。吉田氏は、義兄の日本画家・速水御舟の画室を目黒から茅ヶ崎に移築し、そこに置かれていたものです。

私は、この道具と一緒に舞台に立ちたいと長く憧れていました。今回、茅ヶ崎の音貞顕彰十周年にあたり、所有者のご好意で

使用させていただくことができました。そして、小川稔氏(音貞塾塾長・茅ヶ崎市美術館館長)の椅子とながもちについての調査から、帝国劇場で「負けたる人」という公演に使われたと判明。続いて、公演日は、一〇八年前(一九一三年)で、十一月二十八日から三日間であったことがわかったのです。さらに十二月二日からは、松井須磨子の「サロメ」が上演されていました。あの椅子とながもちが、須磨子の舞台を観ていたのかもしれない。さすがお不動様?と貞奴さん?のパワーでしょうか。

今回の川上貞奴版サロメは、演劇の舞台であると同時に、三人の茅ヶ崎にゆかりある偉大な文化人の足跡を辿るものともなりました。

一、川上貞奴一座の台本を抜粋使用(岐阜県成田山貞照寺蔵)

大正時代の台本は、筆やペンで書き写され、数点が現存しています。読みやすいものを選んで、テキストを起こし、台本として整えました。

二、山田耕柞の直筆譜を、箏と尺八でアレンジし生演奏(明治学院大学近代音楽館蔵)

山田耕柞は、「音楽担当」として、貞奴サロメに関わっており、「序曲」と「サロメの舞」の譜面があります。元々は、オーボエなどの六重奏ですが、今回は三曲で奏しました。

三、速水御舟の「炎舞」「名樹散椿」(山種美術館蔵)を背景に、画室所蔵の椅子とながもち(個人蔵)を使用

茅ヶ崎に移築され、速水御舟画室が現存します。御舟の作品二点(重要文化財)の画像データをお借りし、舞台の背景として映写、その中に、王座とながもちが君臨しました。上演の記録映像を見ると、椅子とながもちが喜んでいるよう

にさえ見えてきます。一〇八年ぶりのライトが嬉しかったのか、ずつとサロメをやつてみたかったのかも?

椅子とながもちが、舞台上での移動を容易にするためか、見た目よりもずつと軽量です。椅子は肘掛けを含む幅六五センチに対し、座面奥行き四〇センチと浅く、当時の小柄な日本人を大きく見せる工夫かもしれません。ながもちが、開くように見えますが、中は空洞。三面にしか柄がありません。渦のような柄は、鋳留めに見えますが、全て木製です。

また、御舟アトリエを目黒から茅ヶ崎に移築した吉田幸三郎氏は、演劇協会を主催したり、芸術家を育てるなど多趣味な文化人でした。氷室椿庭園の旧主、氷室花子さんの叔父が吉田氏の義理の兄弟にあたり、花子さんは御舟作品「花の傍」のモデルです。

サロメ ↓ 恋の秘密は死の秘密よりもずっと大きい。恋の外に思ふことは何にもない。

サロメとして、茅ヶ崎の大偉人の作品に囲まれ、共演することができたのは、身にあまる光栄でした。

ミニレクチャー配信の情報

小川稔氏 「茅ヶ崎と近代演劇」速水御舟画室からの発見」企画は「茅ヶ崎の文化景観を育む会」

椅子とながもち、またそれを巡る文化人について、公演当日のミニレクチャーを、音貞オッペケ祭YouTubeチャンネルで配信しています。

茅ヶ崎郷土会から

新春を寿ぎつつ、会員の皆様の無事健康を祈ります

平野文明(会長) 杉山全(副会長) 熊沢克躬(事務局長)
尾高忠昭(会計・史跡めぐり) 山本俊雄(史跡めぐり・勉強会)
尾坂郭子(茅ヶ崎かるた) 森早苗(勉強会・茅ヶ崎かるた)
監事 羽切信夫 相談役 青木昭三
協力員 片田明男 小山章治 西輝幸 原俊一 前田照勝

【これからの行事予定】

三月までに、次のような行事を予定しました。皆さん！感染対策を取った上でご参加ください。

○勉強会 Study Room 1月18日(火) 13～16時
場所 うみかぜテラス

「姥神と姥島 えぼし岩の話」 平野文明会員

○勉強会 Study Room 2月22日(火) 13～16時
場所 うみかぜテラス

史跡めぐり事前勉強会「横浜市都筑・港北区の城跡等」 山本俊雄会員

○史跡めぐり3月12日(土) 8時50分 駅改札前集合

「横浜市 小机城・茅ヶ崎城跡、大塚歳勝土遺跡、横浜市歴史博物館見学」案内 山本俊雄会員

○市民文化祭 郷土写真展2月14日～18日「史跡巡り・市内で見る野鳥・柳島風景など」市役所市民ふれあいプラザ

○23ヶ村中島村の編集は、固定会員のみの参加とします。

1月25日、2月1日・8日、3月1日・15日 うみかぜテラス、13～16時

【行事の変更・中止は郷土会のホームページでお知らせします。】
○湘南地区まちづから協議会コミセン部会から、茅ヶ崎郷土会へ講演会開催の依頼がありました。

2月23日・3月2日(水)「中島地域の歴史①・②」
3月9日(水)「中島の歴史 現地探訪」

いずれも10～12時 場所はコミュニティセンター湘南
お話と現地説明は平野会員が担当します。

八〇名まで受け付け、事前申込が必要とのことです。
電話57-5655

【152号正誤表】

14頁上段 1～8行を削除(訂正済の号も発行されています)

【編集後記】

今回もたくさんの方々が寄せられました。執筆して頂いた方々にお礼を申し上げます。

子ども向けの行事を郷土会でできたらいいだろうなと思っています。会報に子ども向けのページを設ける、子ども向け歴史巡りやお話し会を行うなどです。皆さん！いかがでしょうか。

本誌に対するご意見・感想を待っております。どうぞ編集担当の平野(090-8173-8845)まで。本誌はHPでも見ることが出来ます。URLは <http://chikyodokai.wp.xdomain.jp/>。